

12. 主の使いは答えて言った。

「万軍の主よ。

いつまで、あなたはエルサレムとユダの町々に、あわれみを施されないのですか。

あなたがのろって、七十年になります。」

ゼカリヤは、バビロン補囚から数えて七十年後にエルサレムに帰還したユダの民が周辺諸国の妨害に遭いながらもエルサレムと神殿再建に取り組むのを励ました、預言者です。

統一王国であったイスラエルは、ソロモンの犯した偶像崇拜の罪により息子レハブアムの時代に北王国イスラエルと南王国ユダに分裂します。そして、その後は偶像崇拜が蔓延るも、北王国イスラエルは預言者主導の、南王国ユダは王主導の宗教改革により、滅亡を免れて生き残っていきますが、しかし最後はやはり偶像崇拜の罪のために神さまの怒りとさばきを受けて、北王国イスラエルは紀元前722年にアッシリアによって滅ぼされ、南王国ユダは紀元前586年にバビロンによって滅ぼされ、イスラエルもユダもこの地上から完全に消滅してしまうこととなってしまったのです。しかし、それからバビロンは新興国ペルシャによって紀元前539年に滅ぼされ、ペルシャの王クロスは、イザヤによる預言の通りに(イザヤ44:28-45:1)、ユダの民を解放してエルサレムと神殿を再建させることを命じました(歴代36:22-23、イラ1:1-4)。とは言っても、エルサレムの復興と神殿の再建は容易なことではありません。エルサレム滅亡以来そこに住み着いていたサマリア人やエドム人の度重なる妨害に遭って15年間再建工事は中断させられます。神殿再建が思うように進まないため、人々は自分たちの家は建てたが神殿は建てようとせず、自分の生活を守ることに終始するようになってしまいます。しかし、そんな中、あきらめと怠慢を叱咤する預言者ハガイやゼカリヤの励ましにより紀元前520年に工事は再開し、遂にエルサレム陥落以来70年を経て紀元前516年に悲願の神殿完成をみるに至ったのでした(イラ6:15)。

ゼカリヤ書は、「主はあなたがたの先祖たちを激しく怒られた」(1:2)、「あなたがたの先祖たちのようであってはならない」(4)と先祖の罪の総括から語り始められます。「先の預言者たちが彼らに叫んで『万軍の主はこう仰せられる。あなたがたの悪の道から立ち返り、あなたがたの悪いわざを悔い改めよ。』と言ったのに、彼らはわたしに聞き従わず、わたしに耳を傾けもしなかった。 - 主の御告げ。 - 」(4)それで、「わたしのしもべ、預言者たち」の警告に聞き従わなかった先祖たちはその警告の通りに滅び失せてしまいます。預言者たちは死に絶えてしまいましたが、彼らの語った「わたしのことばとおきてとは、あなたがたの先祖たちに追い迫ったではないか」と言われます(6)。預言者は死んでも、彼らの語った神のことばは死ぬことなく、むしろ生きて働いて、彼らを断罪し、そのことばの通りに彼らを滅ぼしました。そして、神のことばが冗談ではなく真理であると彼らを真顔にさせて思い知らせ、彼らに悔い改めの心を起こして神さまに立ち返らせたのです。

ゼカリヤの前に現れた赤い馬に乗る御使いは、全世界を視察するために遣わされて行った御使いたちの報告を受けて神さまに尋ねます。「万軍の主よ。いつまであなたはエルサレムとユダの町々に、あわれみを施されないのですか。あなたがのろって、七十年になります。」(12)この「あなたがのろって、七十年になります」とはエルサレム陥落から神殿再建までの期間を意味します。亡国の憂き目に遭う期間が「七十年間」とは、エルサレム陥落の際にエレミヤがあらかじめ予告していた期間です。「この国は全部、廃墟となって荒れ果て、これらの国々はバビロンの王に七十年仕える。」(エレミヤ25:11)ダニエルはこのエレミヤの預言からエルサレム陥落から再建までの期間を七十年間と知り、灰をかぶって先祖の罪を悔い改めました(ダニエル9:2)。どうして亡国の期間が「七十年間」と定められたのでしょうか。その最終的な理由は勿論神さまのみぞ知るところですが、モーセを通して与えられた十戒の第一、二戒に付け加えられた次の一言から十分に推測することは可能です。「あなたの神、主であるわたしは、ねたむ神、わたしを憎む者には、父の咎を子に報い、三代、四代にまで及ぼし、わたしを愛し、わたしの命令を守る者には、恵みを千代にまで施すからである。」(出エジプト20:5-6)「三代、四代にまで」とは罪を犯した当人とその子ども、さらには孫、ひ孫にまでとなるでしょう。日本で言えば、戦時

中第一線の 30 代、40 代でバリバリ活躍していた世代は今やほとんどこの世には生存せず、その子どもでさえ今や 70 代から 80 代の老人で、孫はようやく 60 代から 50 代で退職の時期を迎え、その子どもたちに至ってはじめて 40 代から 30 代で働き盛りの世代となります。そして、みことばによれば、この今の 30 代、40 代までが呪われる対象となり、彼らが神さまに呪われ自分たちの罪を思い知らされて後に、呪いが解かれて「千代に至る祝福」に入れられることになるのです。これが呪われた「七十年間」の意味です。つまり、敗戦後 63 年を迎える 2008 年の今年はまだ呪われた「三代、四代」の最後の時期に属し、これから後さらに 7 年間は呪われた年月を過ごさなければならないこととなります。

このような中で、私たちがしなければならぬことは何でしょうか。まずは、先祖の罪のために今は呪われた 70 年間の中にあるということを「思い知る」ことです(民数記 14:34)。そして、何が先祖の罪であったのかを冷徹に総括して悔い改めなければなりません。同じ罪を犯してさらに七十年間呪われないよう、悪かった所は素直に認めて改革する必要があります。

渡辺信夫先生という 85 歳になる牧師がおられます。この先生は日本基督教会・東京告白教会の牧師でカルヴァンの「キリスト教綱要」を翻訳し、さらには宗教改革史や古代教会史に於いても膨大な研究書や著作を世に出されたことでも有名で、日本を代表する神学者のひとりだと思います。先日その渡辺先生のご自宅を訪ねる機会があり、「キリスト教綱要」を原語のラテン語から日本語に翻訳する場面を見せてもらう貴重な機会に恵まれました。その中で、どうしてこれほどの膨大な研究をするに至ったのかという質問に、先生は、戦時中の神社参拝強制や侵略戦争に抵抗しきれなかったご自分の罪の悔い改めとして、神社参拝強制の圧力に屈して侵略戦争に荷担した戦時中の罪を二度と犯さないようにするにはどのような教会を形成したらよいのかと考えて、教会論を研究し、歴史を研究し、そうして、これだけの研究の成果を残すに至ったのだと説明なさいました。私は、それを聞いて、はっとさせられました。私は単に先生が優秀で頭がよいからこれだけの研究を残されたと思っていたからです。でも、そうではなく、これらの膨大な研究の成果は、かつての自分の犯した罪を反省し、悔い改め、もう二度と同じ罪を犯さないようにするためにはどうすればよいのか、どのような教会を形成すべきであるのか、そもそも教会と何なのか、牧師とは何をすべきであり、どのような教会を形成すべきであり、教会の本質は何で、何が本質的な使命で、何を目標として何をすべきであるのか、それを探求してきた結果として、言うなれば、悔い改めの実として、結果的にこれだけの研究成果を残すに至ったということです。

私たちも同じではないでしょうか。私たちの先祖の罪のために、私たちは今は七十年間の呪いの中にあります。これからあと 7 年間は呪われた時を過ごさなければなりません。しかし、それから後、七年後からは、ゼカリヤの時代のユダのように、回復の時を迎えます。七年までは呪われるけれども、七年以降は回復の時を迎えるのです。祝福された約束の地カナンに入ることが許されるようになるのです。私たちは、その時に備えて、神さまを仰がなければなりません。先祖の罪が何であったのかを思い知らなければなりません。そして、何が悪かったのかを素直に認めて、悪かった所を悔い改めて、改革しなければなりません。そのようにして、子々孫々千代に至る祝福を受ける土台を築いていかなければなりません。

兄弟姉妹のみなさんが、ゼカリヤを通して語られた神さまのみことばに教えられ、励まされて、罪を悔い改めて、神さまのみこころを行い、そうして、子々孫々千代に至る祝福の土台を築いていかれるよう、主の御名により祈ります。